



## 『新しい傘』

---

目覚まし時計を止めたあと、さーっという音が気になってカーテンを開けたボクの目に飛び込んできたのは、まだ夜が明けきれない、ちょっとインディゴブルーな風景だった。

庭の広葉樹の葉っぱが、雨つぶに打たれて激しく上下している。なんていう木だか知らないが、ちょっぴり寒そうだ。

昨日のうちに天気予報を確認しておくんだってと自分の軽率さを反省しつつ、眠い目をこすりながらダイニングに向かった。

今日は履修している地層学の実習で、比較的近所にある瑞浪地層群の観察に出かける予定だったんだけど、これじゃ延期だな。

ということは、また座学か。小池の講義は退屈なんだよな。行くのやめようかな。

母の用意してくれたトーストをかじりながら、ボクはまた窓の外のゆがんだ景色をぼんやり眺めていた。

「じゃ、行ってきまーす！」

朝の準備を整えて、玄関から家の中にごあいさつ。

ボクの右肩には講義テキストの入ったリュック。手には新しく買った傘。先週、河川敷であったフリマで格安で手に入れた最近のお気に入りだ。

今日、傘デビューか。いいね、どんな使い心地かな。

そう。雨の日も悪くない、かも。

## 『親子ー公園にてー』

---

最初の一滴は、右のほっぺたにきた。

ぴちゃっ、という冷たい感触。けっこう大粒だ。

朝から雲行きが怪しいと思っていたけど、ついに降り始めたか。

見上げると、空は一面びっしり覆い尽くされた雲で鉛色だ。

心なしか周りの木々も、ついさっきより大きく激しく揺れているように見える。

ざわざわざわ。びゅうおーっ。

だいぶ風も出てきたようだ。

あっ、眼鏡にも水滴が。そして耳にも、首筋にも。こりゃ土砂降りになるな。

「おーい、一郎。キャッチボールは終わりだ！雨天中止！帰るぞー！！」

急いで息子に緊急避難の指令を出す。

「はーい！」

と息子が元気よくこちらへ向かい始めたが、雨模様から激しい雷雨に変わるのに5秒もかからなかった。

車に向かって駆け出した僕らだったが、途中で諦めてゆっくりと歩き出した。

汗をかいた身体に、冷たい雨が気持ちいいや。

眼鏡を取り、顔を空に向けて目を閉じる。

帰って一緒に風呂に入ろう、一郎。

## 『もうひとりの親友』

---

村上とは20年ぶりの再会だった。

髪はみごとなロマンスグレイになっていたが、それでも西口の改札で見たときはすぐにやつだとわかった。

お互い苦労してんなあ、と笑いあいながら肩を叩いた。20年は一瞬で巻き戻った。

近くの居酒屋に入って旧交を温める。

とりあえずビール。えだまめ、大根とジャコのサラダ、串焼きの盛り合わせ、そして、ほたるいかの沖漬け。

子供はいくつになった。じいさんばあさんは元気か。家、買ったんだってな。仕事はどうだ。

がんばるって、しんどいよな。生きていくって、たいへんだ。

でもさ、お互い、ひとりでがんばるのはよそうな。がんばるために、生きているんじゃないんだから。

あいつもさ、死にしまうことはなかったのに。

22年前、いっしょの社員寮に入った同期の仲間。おれたちの親友。

村上は何も言わずうなずいて、一気にジョッキを飲み干した。左手は堅い握りこぶしになっている。

今年の夏は、あいつの墓参りにいこうや。

日本海の、うまいほたるいかを食いにいこう。

## 『走れ』

---

スタートラインに立った。

天気は良好。空気は乾燥していて、ちょっと追い風。トラックのコンディションはベストに近い。雲がない。空が青くて高い。クラスメイトの声援に混じって、どこからか鳥の鳴く声が聞こえる。

靴紐をもう一度チェックする。肩をぐるぐると回す。足首を左右にひねる。背筋を伸ばし大きく深呼吸をする。

「位置について！」

意識して、気持ちを抑えてゆっくりとクラウチングにはいる。白いラインが、今日はひときわ鮮やかだ。

もう一度まばたきをして、全神経を集中する。

「よーい！」

素早く膝を伸ばし腰を上げる。ラインを見ているけど見ていない。心臓の脈打つ音以外、なにも聞こえなくなる。呼吸も止まる。周りがすべて止まっている。

頭の中にはなにもない。ピストルの音と振動だけを待っている。

この瞬間の、自分が好きだ。

## 『待合せ』

---

デートコースは何度も下見をしたけれど、やっぱり不安がいっぱいだ。

予定の店が臨時でお休みだったらどうしよう。遊園地の乗り物は動いてるかな。

ほんと、緊張しちゃっているんなことが頭の中をグルグル回っていて、周りの雑音がまったく聞こえなくなっちゃう。

中3にもなるのにケータイを持たせてもらえないボクは、こういうオーソドックスな待合せしかできない。

オヤジのケチ！

でも彼女に「こういう待合せってなんか新鮮ね」って言ってもらえたとき、これはイケるかもって、ちょっと思ったんだ。

少し暑くなってきて、センスのいいママに選んでもらった紺のボーダーのロングTの袖を捲り上げる。

ママさま、サンキュ！

噴水池の水が太陽にキラキラ反射して、すごくまぶしい。今日はお天気でほんとよかった。

神様、ありがとー！

あっ、彼女の呼ぶ声だ！

振り向くと、笑顔の彼女が手を振って近づいてくる。

でもどうしてこういうとき、彼女の声だけは必ず聞こえるんだろうね！

## 『おばけに会いたい』

---

あのね、パパ。

ショウくんがね、また見たんだって。

木曜日の夜ね、水泳教室の帰り道。夜8時近かったって。

校庭の北側に杉林があるじゃない。あそこの中の曲がり杉っていつてる大きな木の影にね、いたんだって、女の人。

え、おばけじゃなくてゆうれいっていの？ ふーん、よくわかんないけど。

髪が長くて白い服着てたって。足は見えなかったらしいよ。木にかくれてたみたい。

ショウくん？ もちろん怖がってた。

でもさあ、ボク、会いたいんだよね。おばけに。

会いたがってる人には出てきてくれないんだよね。怖がる人には何回も出てくるのにさ。

どうして来てくれないのかなあ。

うん、おばけに会ったらさ、聞いてみるんだ、ママのこと。

ボクのおかあさん、元気にしてますかって。

## 『茄子の花』－あるおばあさんの日記より－

---

今日で87歳になった。

じいさんが天国に呼ばれてから、9年と1日、経ったということだ。

わたしももう、いつお迎えが来てもいいように準備を整えている。でも、荷物をまとめているとなかなかお声がかからない。

神さんも忙しいようだ。もう少し、のんびり待つとしよう。

庭に茄子の花が咲いた。

紫色が鮮やかで、花卉のシワが生まれたての赤ん坊の手のひらのようだ。

小さいけれど、懸命に生きて実をつけようとする強い意志と命の前向きさが伝わってくる。

こんなちっぽけな田舎の庭に植えられて、さぞや心細いだろうに、それでも胸を張って堂々と花ひらいている。

じいさん。あんたの残していった茄子が、今年も見事な花を咲かせているよ。

この茄子といっしょに、わたしもあと1年、がんばってみるとするか。

来年もまた、こうして日記が書けますように。

七夕さま。



## 『アイスクリーム』

---

教室の掃除が終わってあとかたづけをしていると、ねえと呼ぶ声が聞こえて振り返った。

「アイス、食べて帰らない？」

片目をつぶって舌を出しているミュウの顔を見て、おもわず自分の表情も緩む。

「図書館、寄らないの？」

「今日はね。昨日まとめ借りしたから」

わざと舌を出したまましゃべるミュウがまた可笑的い。

毎日、学校が終わるのが少し寂しいのだけれど、彼女のおかげでいつもハッピーな気持ちで帰るのがうれしい。

校門のすぐ脇に軽トラックを改造したような移動販売車が止まっている。

美術部の上級生が3人、ビーチパラソルの下の椅子に座りクレープを食べながらおしゃべりをしている。おしゃべりといっても半分以上が笑い声だけ。

女子の間ではどちらかといえばクレープが人気。けれど、あたしたちはアイス専門。

いつもの抹茶アイスを買って、グラウンドを見渡せるベンチに座る。

ベンチを木陰にしてくれる緑の濃いプラタナスの木が、風にふかれてざわざわと大きな音を立てる。

暑い。けど、このざわざわは、ちょっと涼しくて、ちょっと気持ちいい。

アイスを食べながらグラウンドをぼんやり眺める。

野球部の威勢のいい掛け声が響き渡る。よく聞き取れないけどエーイとかオーエとか。ときどきかきんというボールを打つ乾いた音。

青空に飛行機が飛んでいく。

風とざわざわ。エーイ。ざわざわ。かきん。

ぷっと吹き出す声にハッとした。

となりに、にやにやと三日月形の目であたしを見ているミュウがいた。

なによどうしたのよと彼女を見返すと、ますますニヤけながらひとこと。

「カノン、さっきからリョウスケのピッチング練習ばっか見てるし」

ぎゃあーっ！

顔が熱いっ！

どわーっ、スカートにアイス落としちゃった！

## バス停

---

それはアブラゼミの甲高い鳴声で頭が痛くなるような、暑い夏の日の午後のことだった。ボクはひとり、N駅行のバスを待っていた。

片側1車線の、どこにでもある田舎道だ。

バス停には、古くてところどころペンキがはげかけているベンチがひとつ、申し訳なさそうに置かれている。

近くに日差しを遮るものはなく、またその日は雲ひとつない晴天で、南の空で大威張りしている太陽が憎らしいほどまぶしかった。

バスの来る方向をながめると、道路の先のマンションがゆれて見える。

帽子をかぶってくればよかったと思ったがいまさらどうしようもなかった。

目の前をすずめが横切っていく。暑さに追われ、逃げていくかのように林のほうへ飛んでいった。

首筋を大粒の汗が流れていく。

しかし、ハンカチを出す動作がまた汗を呼びそうで動けなかった。ボクはただじっとバスの来る方向を祈るように見つめていた。

ふと周りを見回してみると、バス停を10mほど離れたところに電柱があるのに気づいた。

急いで、でもゆっくりと電柱の影に入る。生まれていちばん、日陰のありがたさに感謝した瞬間だった。

バスが来た。

乗客はあまり多くないようだ。よかった。座れそうだ。駅までの20分あまり、車内のエアコンで身体を冷やし、ゆっくりさせてもらおう。

結局、ポケットからハンカチを取り出して、首筋の汗を拭きながらバス停に向かう。

5秒後、バスとボクはバス停で出会う、はずだったのだが、バスはスピードを保ったまま、停留所の存在を無視してそのまま目の前を通り過ぎていった。

ボクは右のうなじをハンカチで押さえたまま、走り去っていくバスのおしりを見つめながら呆然と立ち尽くしていた。

暑い夏の日の午後のことだった。